

資本主義社会の仕組み

労働者の給料はこう決まっている

ペットボトルのお茶が1本160円である理由をご存知ですか？「160円分の満足感があるから？」違います。お茶1本作るのに160円分の労力（コスト）がかかっているからです。

私たち労働者も同じです。会社と労働契約を結び、労働力という「商品」を提供しています。私たちの給料は「労働力をつくるために必要なコストを合計した金額」と考えられます。

労働者が「労働力」をつくるには、働くためには、食べるための食費が必要です。生活するための住宅費、服を着るための衣服代、また、ストレスを発散するための娯楽費、知力を養うための知識習得費がかかります。さらに、役職に就けば、それだけ精神的なエネルギー、接待等の出費が増えるため、その分のコスト（役職手当）が上乗せされます。これらの「労働力の生産コスト」を積み上げたものが私たちの労働力「商品」の価値になり、その対価を給料として受け取っているのです。言いかえれば、私たち労働者は、働き続け、生きていくために必要な最低限の対価しかもらっていないのです。

会社はいかにして利益を出すのか？

会社が一つの商品を作り出すのに必要な費用には、原材料費、機械（減価償却費）、人件費があります。原材料、機械についてはその価格がそのまま商品の価格にシフトします。そこで資本主義社会において**会社が利益を上げるためには、「人件費」の部分、つまり「労働者をいかに効率的に使うか」が重要になってきます。そのため会社は給料以上に労働者を働かせること**によって利益を生み出そうとします。

私たち労働者は「生きていくために必要な最低限の給料」しかもらっていません。会社の言うとおりに「頑張る」（お中元・お歳暮・JRK活動・ただ働き等）と**生活はより苦しく**（お金も足りない・休養も取れない）になります。

会社と労働者は考えが違うのが当たり前なのです。「会社のやっている事だから間違いない」という考えは見直すべきではないでしょうか？

参考文献

「超入門資本論」
木暮 太一 著
ダイヤモンド社



資本主義社会のルールを解き明かしたマルクス主義経済について分かりやすく解説してあります。



若いカ

第 35 号

2015年 10月15日

発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

JR 092-2075

NTT092-483-1515